

# 北岳バットス第4尾根行

- **メンバー：**
- **中川滋夫 (名誉隊長)、竹中彰 (山行隊長)、本間浩 (サポー隊長)、藤原朋信 (登攀隊長)、金子晴彦 (副隊長)**
  
- **行程：**
- **2010年**
- **10月5日 (火) 大樺沢より白根御池キャンプサイト(11:20- 15:20)**
- **10月6日 (水) 第4尾根通常取りつきまで(4:30- 11:00)、その後懸垂下降等で下山(16:00 白根御池)**
- **10月7日 (木) 下山(7:55- 10:10)**

- 3年前、中川さんの針葉樹会報への寄稿からこの山旅は生まれた。卒業して40~50年、岩からは遠く離れたものの、澄み渡った秋空の下の冷た乾いた岩の感触の素晴らしさは指先から消えようが無い。それをバツスの4尾根で再び味わいたい。
- この思いを追って中川さんを中心に同志が集まりガイドも頼んで計画ができた。名付けて北岳逍遥隊、総勢は10名を超えた。若手の山田さんに秩父の日和田山で登攀訓練もしてもらった。しかし予定の2008年8月末は中央線も停まるほどの豪雨で出かけることすらかなわなかった。
- 翌2009年、リト役を務めるメンバーに様々な事情があり計画は成立しなかった。年末にほか秋の偵察を踏まえ、冬山同年代仲間と共に池山吊尾根から雪の北岳に登頂、意欲は辛うじてつながった。
- そして、2010年の新年会で、「10月上旬の平日決行」との意味だけが確認された。ところが具体化されないままに夏は過ぎようとした。たまらず中川さんが「藤原さんはどうだろう?」と声を上げた。6月に自由の身となり彗星のように針葉樹会に現れた氏に連絡して応援を頼み込む。それが急務となり日々山を闊歩している仙人を探索、無事同行の合意をいただいた。
- 途端に氏から、まるで予期してでもいたかのように綿密な訓練メニューが提示され、奥多摩や小川山での岩登り訓練が開始された。「そこをすいすい登れば4尾根なんかは問題ない」そけしかけられた。

- ホームグラウンドの小川山で藤原氏はまるでましろのように岩を自在に駆け巡り、メンバーを阿然とさせた。2~3ミの岩のへこみや角を利用して登るボルダリング。わずか30cmの高さから落ちまわいと必死に歯を食いしばり力尽きて落ちる。それを繰り返す。何故こんな練習が必要なのかと思いつつも、登りきった達成感の素晴らしさは疑いようが無い。力みのせいか噛みしめた奥歯が痛み、出発前に歯医者に2度も通うことになった。
- わずか2度の訓練、しかもろうじてマリリンとブリッド(女性名)を登っただけで「すいすい」などからはほど遠かった。しかし藤原氏は「これでいいでしょう」とゴーサインを出してくれてようやく計画が立った。メンバーは2008年の縮小版と言うことで本間さんがサポーターとして再び完全支援体制を敷いてくれ5人となった。



小川山廻り目平にて  
2010.9.22

藤原氏川上村山荘  
氏の修業基地、小川山は  
ここから歩いて30分

記録的に暑い夏だったせいで秋の訪れも遅い。9月下旬はやや不順な天候が続いた。当初は10.4～7を予定したが4が雨と予測され延期、スベア無しで5～7とした。藤原仙人の敏捷な判断だった。結果、毎日晴れて、この成否を天気のせいにするにはできなくなった。

9時7分甲府駅着。改札に現れた客引きを本間さんが脅して広河原まで5人で11000円にさせた。サポーターの抜群の威力が発揮された。



広河原は荒れている。2009年10月には護岸工事の基礎が大きい崩れていた(下)。今年それは見事に修復されてきれいな石壁になっていた(上)。しかしいずれこれも壊れる。永遠にこの繰り返しだ。



日本酒 2パック2本  
ザイル

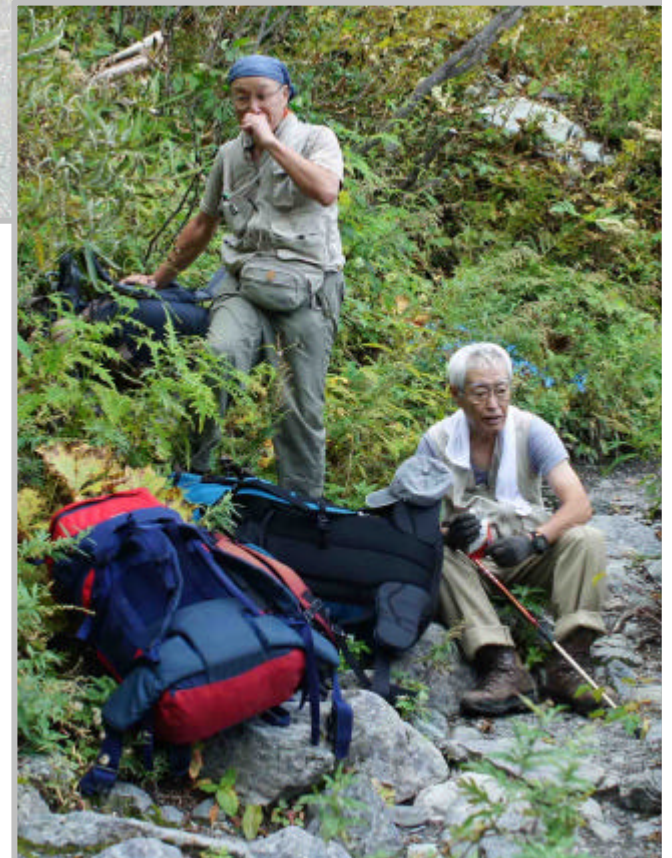


ムービーカメラ



生卵 10個  
すき焼き牛肉  
ザイル ビール

各人荷物は超重量級



炊事道具  
テント・食糧



広河原よりバツルス(2009.10)



大樺沢・巨岩と苔と



## 大樺沢秋色

広河原から重荷を背負って二俣まで3時間。  
御池小屋への急登と比べてはるかに緩やかな道だ。



御池小屋より

山本健一郎さんの遺品のメス TENT と赤いキッチン TENT。立派な BC だ。それにしても山本さんの TENT は 6KG と今時にはめっぽ重い。1990 年代の最新鋭 TENT だ。



池のほとりにあった旧御池小屋は数年前草すべりからの雪崩で倒壊した。そのあと深い樹林におおわれた斜面の下に新しい小屋ができた。水洗便所のある実に立派な山小屋で生ビールは飲めるしソフトクリームも食べられる。時代はすっかり変わった。

まだ暗い4時半に白根御池を出発。森の中の木の根の突き出た足下を照らすのにPETZLの高級ライトが威力を発揮した。



バツス沢を登る 10.6 05:59



ガリ

ガリ

下部岩壁帯



### シロバナタカネヒランジ

北岳大樺沢周辺の岩場に生育。実に鮮やかな白だ。

花が赤紫色のものはタカネヒランジと呼ぶ。Bガリへ突き上げる急坂の途中に小さな群落があった。



坊リ下部岩壁 100m 06:42



40年前に登った同じ場所はまるで違って見えた。通常はザイルも出さずに登ると言われる(登ったはずの)Bf1-の100mをわたる下部岩壁帯が圧倒的な壁に見えた。登っている内にかつての心のはやりを思い出した。しかし、あれは登ればそれで良いと言う登り方であり、考えるのは自分のことだけだった。しかし、その後十数年、一歩ごとに考えることは格段に増えた。それが体を重く、足の運びをためらわせる。岩が違っているわけではない、自分が違っているのだ。ここでほぼ1時間かかり、岩壁上部には7時50分到着。



ほぐちはこの矢印沿に進んだ。



赤ペンキで「4オネ」と指示有り)

ガリ

下部岩壁帯の上のトラバースバンドから細く急なレンゼを登り過ぎて引き返した。バンドは草に埋もれて水平に続いていたがはやっていたのか途中から登ってしまったのだ。ようやくガリに下りたが岩屑でぐずぐずで落石の危険が多く対岸の踏み跡をたどって4尾根リッジの末端に出た。予定を1時間越えて9時になっていた。出会いから丁度3時間だ。時間がかかり過ぎている。



★ (到達点・通常取りつき)

2009.10  
八本歯の上  
より

ようやく取り付きだがこの時点で9時。藤原さんがこれからどうするか？と問う登攀隊長は隊全体の動きそのものの判断はしない。それは山行隊長竹中さんが決める。すかさず中川さんが「行こうよ」と断言する。決定だ。



ラスピッチ

のっけから覆いかぶさるような複雑なリッジを藤原さんはすいすいと登り 50m一杯にのぼす。後を竹中さんが続くしかし なかなか進まない。下からも上からも見えない 垂壁で1時間近く苦闘した末 10:25に確保点まで抜け、ほが追う 40年前の9月の赤石沢中央壁での難行を思い出した。

- 確保点から20mほど下り 中間点から中川さんの登攀を援助した。途中で中継しないと下からの合図の声は上に届かない。50m一杯に伸びすぎたザイルはぶら下がるうちに臨機に心はず、頼りは自分の手足だけだ。中川さんは苦闘する。幾度もトライ、腕力が消えかかった。そなたとさすがに登れない。「ちくしょう!」と自らへの掛け声が聞こえる。「ガリに下って登り直しましょか?」と声をかける。「そうしよう」と答えが返って来る。通常取りつきの下の4尾根末端部分はいささか厳しすぎた。
- 結局ほらの挑戦はここまで、1時15分をもって終了となった。数十年を経て突然岩に相対して全力を尽くしたがこれが限界だった。ガリの登り直しを諦めた。岩とはこういうものだったのか!この歳にして全(新)しい発見をしたと言って良い。実に新鮮な、冴え冴えとした思いだった。
- 50m一杯の懸垂下降を3度繰り返して1時半に下部岩壁下に無事辿りついた。スタートして既に9時間がたっていた。途中ザイルにつかまって下りながら垂壁の見事さに見惚れた。こんな壁をとにか登ったんだと言う満足もあった。こうして夢の3年目は取りつきで終わった。



D沢側より尾根基部



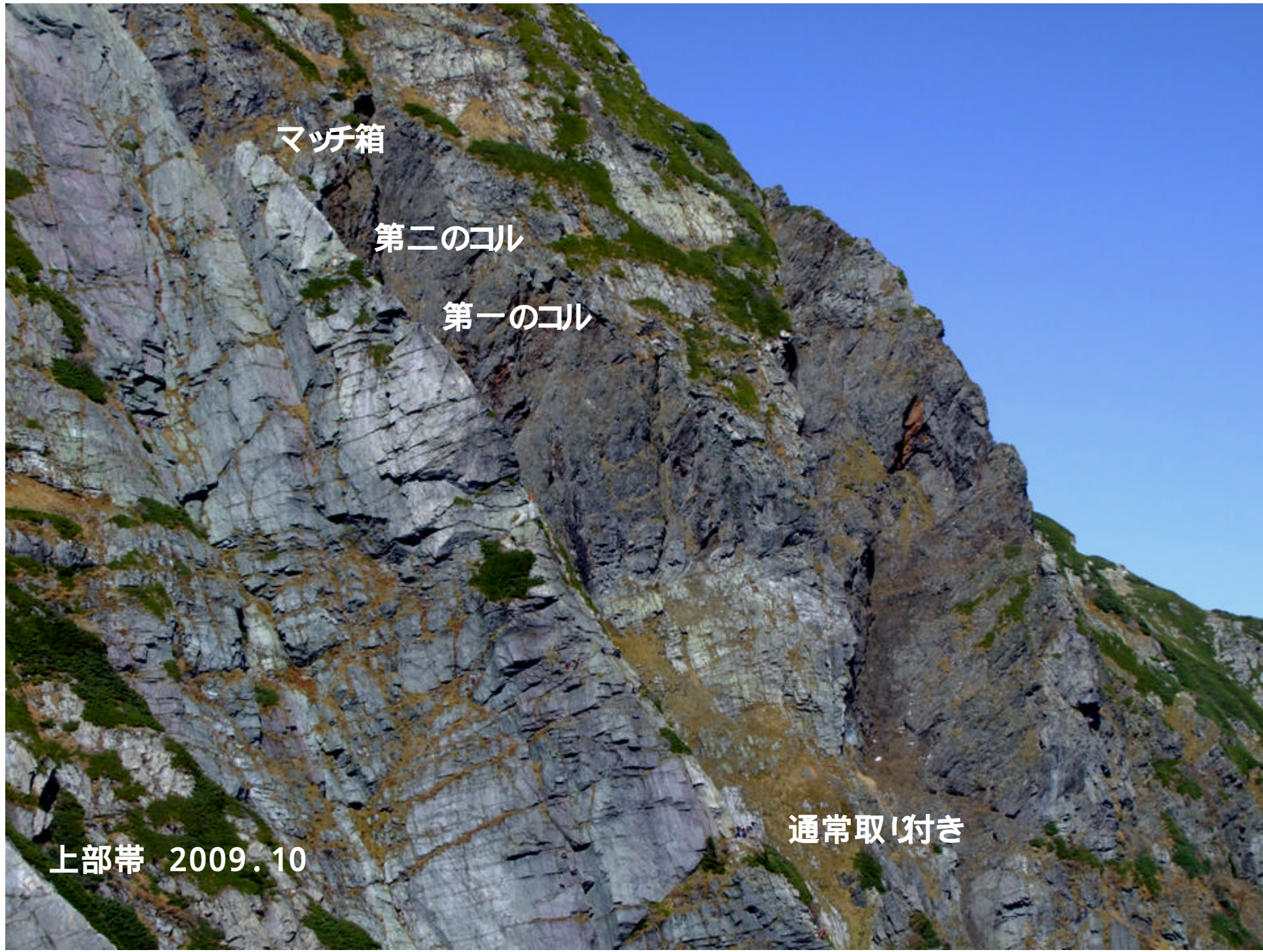
マッチ箱

第二のコル

第一のコル

上部帯 2009.10

通常取!付き



2009. 10. 11 4尾根に約 50人





マッチ箱

第二の科尔

第一の科尔

2009年10月



ポーコン沢の頭よ(2009.10)



甲斐駒南面



## 2009.10北岳頂上直下

4尾根を撤退したものの頂上ではサポーター隊長の本間さんが熱いスープを作って登攀パーティーの到着を待っている予定だった。連絡しようとしても電話は通じない。そのまま放って白根御池まで下るわけにもゆかない。そこで、大樺沢に下りついたところからパーティーと別れぼく一人八本歯経由頂上をめざした。本間さんに事態を報告、合流して一緒に草すべしを下るつもりだった。せめて登山道をましろのように走りたいという思いもあった。

しかし、本間さんが頂上に着いたのは予定の1時から大きく遅れた2時半。登攀パーティーは既に登頂して下山を始めたのだからと判断して3時には下り始めた。ぼくはその20分後に到着、本間さんとは合流できなかった。それでも精神的には結果を知らせるミッションを果たし、正にましろのごとく白根御池小屋を目指した。



バットス沢出会いから1時間 20分、息せき切って登った頂上はガスに巻かれて静かだった。標識板の高度の数値だけが白く目立つ。

明治 37年 7月 7日、北岳に三角点が立てられ高度は3192mと測定された。以来 100年、平成 16年 10月の調査で、最新の高度は3193mと判明、平成 18年 7月 8日、新たな位置に新しい三角点が設置された。そのせいで標識板の数字は真新しい。

帰りがけに寄った麓の芦安山岳館で、保存されている古い三角点を拝見した。登頂記念に「ふなくち一番しほり・菊水」の缶を開け一人で乾杯した。



頂上から北へ20分ほど下ると肩の小屋。これだけの高地で人を受け入れる立派な施設があるということに感激した。かつて当たり前とっていたことこやたらに感激する。それだけ歳をとったということか？



小太郎尾根は北岳北方稜線から北へまっすくに、ゆるやかに伸びている。その先に甲斐駒の、脳天を割られたような特異なピクニックがそそ立ち、雄大な景観が広がる。



水曜日の午後 4時 15分。3000mの高地にはさすがに人影は無い。道は斜面をゆるやかにトバースするだけで足は自然に前に出る

こ言つ天の高みを歩 楽しみは久し振いだ。会社の連中には申し訳ないが、ずる休み万歳！





歩いている内に雲の隙間から太陽の光がこぼれ、山肌の紅葉を一瞬華やかに輝かせた。



山小屋を倒壊させた雪崩が一気にかげ下った高度差 400mにわたる大斜面をジグザグに下る。もう大部前からテントは見えているのだがなかなか近づかない。「おーい」と叫ぶと「よひとつ」と声が返ってきた。皆は既にBCに落ち着いているらしい。途端に元気がわいてきた。



1kgの肉の関西風すき焼き  
今回の食糧はとにかく豪華、  
そして重い。

豪華な夕食の後、夜空はすっか晴れわたり 名前も分らぬ無数の星が現れた。分かるのは 北斗七星、オリオンくらいだ。あまりに見事で写真をとってみる気になった。すると結構はつき撮れた。オリオンの中央の3星の先にシリウスがあると言ふ説明がよや呑み込めた。そうしている間に流れ星がいくつか飛んだ。



天気は毎日良かった。しかしこの季節にしては暑い。今年の夏は異常だった。

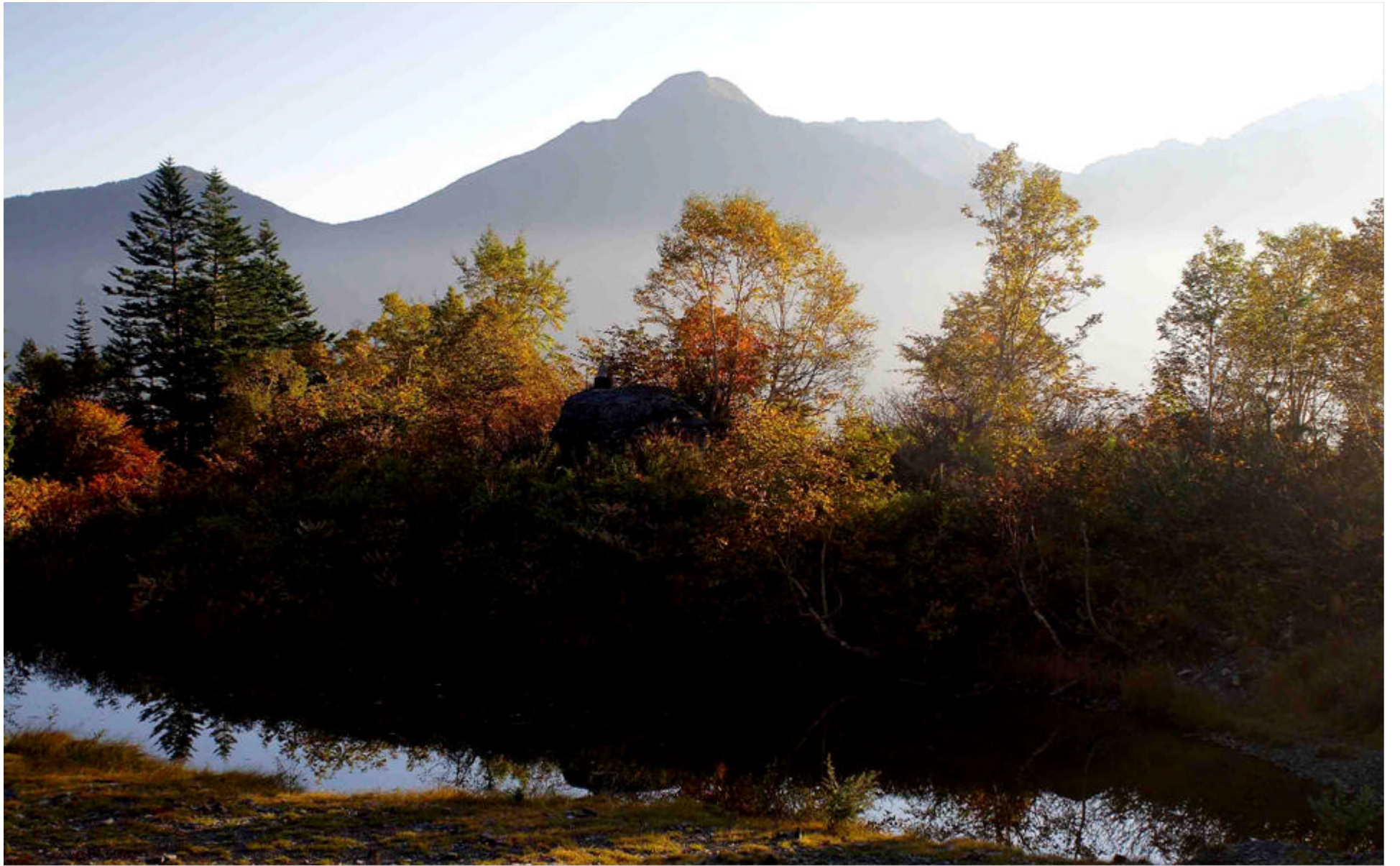
2010.10.7 05:58



2010.10.7 06:14



池山吊尾根



高嶺 (2779)をのぞむ



夢追い人5人

- 今後についてはも無理かと思っていたところ、藤原さんから示唆に富む再挑戦の戦略提案があった。
- その通りに進めるのかどうか？ それは各メンバーの判断とこれからの精進次第だが、今回の実戦によって次にはどんなステップを踏めば良いのかの判断だけはできるようになった。
- この夢追いがどうなるか？ それは今後ほららがどんな山登りをするかで直結するだろう
- この間北岳にお3度登った。池山吊尾根、小太郎尾根を従え、堂々として人懐こくそして厳しい山だ
- その山の核心部にふれる夢はもう少し続きそう。

